吹田市立博物館
SUITA CITY MUSEUM

すいはく
No.44
博物館だより

吹田市制施行70周年記念事業
平成22(2010)年度　秋季特別展

災害から地域遺産をみなおす

－吉志部神社の復興－

平成22(2010)年10月9日(土)～11月28日(日)

NO．14 ペーパークラフト　吉志部神社本殿（縮尺約1/18）

吉志部（きしべ）神社本殿は慶長15（1610）年建築の七間社流造（しちけんしゃながれづくり）で、重要文化財に指定されていましたが、平成20（2008）年５月、放火とみられる不審火により、焼失しました。本殿建立400年祭を２年後に控えた中でのたいへん不幸な出来事でしたが、地元岸部地区の関係者の熱意と努力により迅速な再建工事が進められ、来年３月には本殿等が再建される予定です。

今回の展示では、神社の発掘調査等の成果からみえてくる岸部地区の開発の歴史や地域遺産の重要性を探り、様々な災害と地域の関係を考えます。

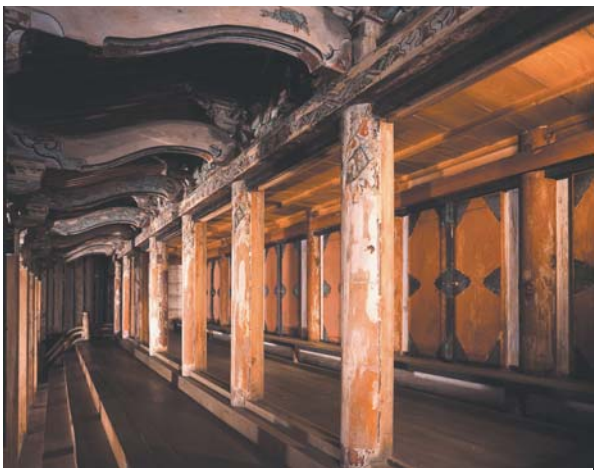
災害から地域遺産をみなおす －吉志部神社の復興－

吉志部神社は岸部北４丁目18－1に所在します。創建時期等は明らかではありませんが、社伝によると、崇神天皇の時代に大和から奉遷して大神宮と称し、その後、応仁の乱によって焼失しましたが、文明元（1469）年に再建、さらに天文３（1534）年に中興されたと伝えられています。江戸時代には天照皇太神を主神として七社明神と呼ばれ、吉志部５か村の鎮守として祀られていました。

吉志部神社は広範囲に神社境内・境外地が残され、特に神社参道は、松並木の中を進んで境内の神門・拝殿・本殿へと続き、昔ながらの吉志部神社の景観をよく残しています。

本殿は、慶長15年の棟札によると、慶長15（1610）年８月に吉志部次郎右衛門尉一和の勧進によって建立されたものです。大阪府下唯一の七間社流造本殿で、屋根は正面中央に千鳥破風・軒唐破風がつく桧皮葺です。当本殿の大きな特色として、軒下を飾る様々な組物や装飾・彩色があり、軒桁を受ける蟇股には鳥、獣、花を配し、その間に花紋や唐草、波紋、龍などが極彩色で描かれています。

全国的に類例の少ない七間社を装飾豊かにまとめた本殿で平成５（1993）年に重要文化財の指定を受けましたが、平成20（2008）年５月火災により焼失しました。現在、地元岸部地区の関係者の努力により再建工事が進められています。



吉志部神社本殿（東から　焼失前）

再建に伴い実施した発掘調査で、基壇の下層で確認された建物跡は、東西桁行１間、南北梁間２間で縁と階を設ける建物２棟が復元でき、拝殿か拝所と考えられます。その主軸は慶長期の本殿と一致し、さらに、旧亀岡街道から北方へほぼ一直線上に伸びる参道と釈迦ケ池（中央）に一致することが確認できました。参道は古代～中世に施工されたと考えられる条里の方向に一致することが指摘されており、また、釈迦ケ池は平安時代築造の可能性もある古い池で、吉志部郷の用水池として貴重な存在であったということから、神社の成立は、水田経営を維持・発展させるためにため池を築造した際、存続することを願って社を建てて水神を祀ったという姿が原初的なものではないのかとも考えられます。

今回の展示では、吉志部神社に関わる本殿の焼損材、棟札、発掘調査の出土遺物等吉志部神社に関わるものを中心に、地域の信仰・歴史等を含め、災害で失われた文化財の持つ重要さを実感していただけたらと思います。

吉志部神社本殿（北から　焼失後）

吉志部神社本殿跡発掘調査の成果

今回の調査は、吉志部神社本殿跡において基壇の築成状況、基壇下の状況を確認するために平成20（2008）年11月～12月に調査を実施しました。

調査では、基壇上に大小合計21か所の調査区を設定しました。基本層序は、上からⅠ層表土、Ⅱ層 灰色粘質土等、Ⅲ層 灰色粘土～黄灰色砂（硬質、地山）です。Ⅱ層を精査した結果、ピット（小さい穴）を掘った後に礎石が設置されたことがわかりました。Ⅲ層では、合計16基のピットが確認されました。ピットは径25～50cm、深さ15～30cmを測る不整円形のもので、礎石の抜き取り穴と考えられます。

今回の調査は小規模な確認調査ですが、次のことがわかりました。

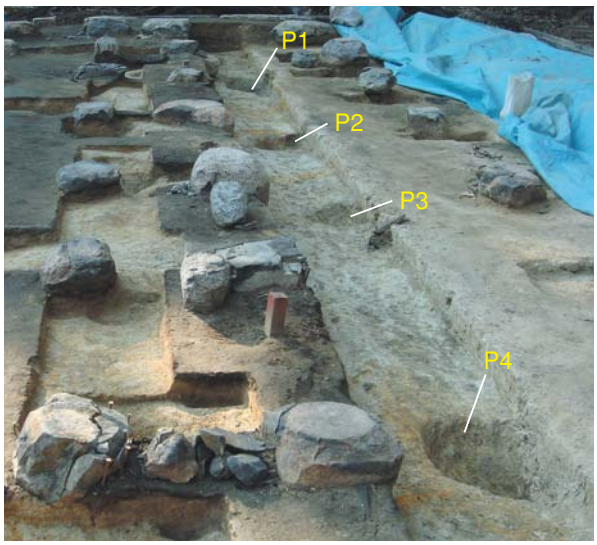
①本殿基壇は硬いⅢ層の上にⅡ層を盛って整地した後、ピットを掘って礎石をすえたものであること。

②本殿に覆屋（おおいや）が設けられた天保期以降に亀腹（かめばら）、石積み等の基壇周囲が整備されたこと。

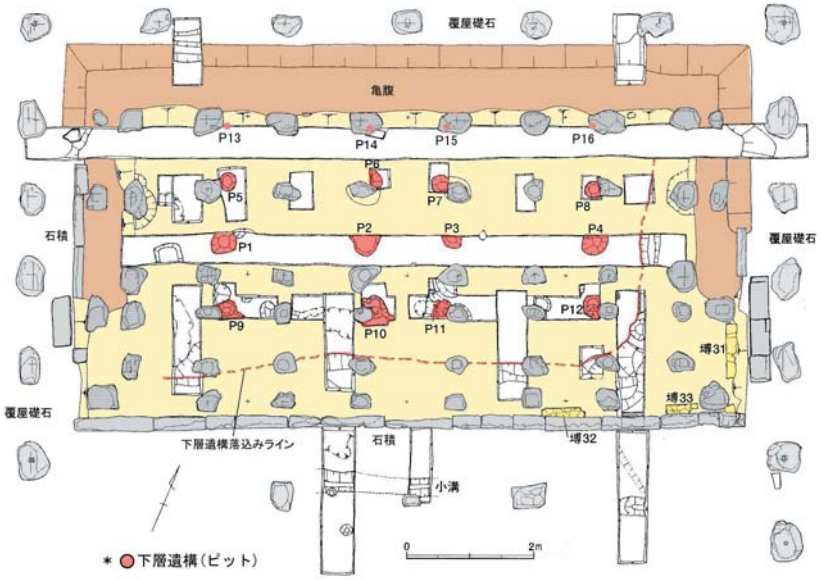
③基壇下層のⅢ層で検出されたピットから吉志部神社本殿より古い社殿があったことがわかり、その配置は神社本殿に方向軸がほぼ一致するところから、室町時代の可能性がある前身建物と考えられること。

（西本安秀）

調査区全景（北東から）



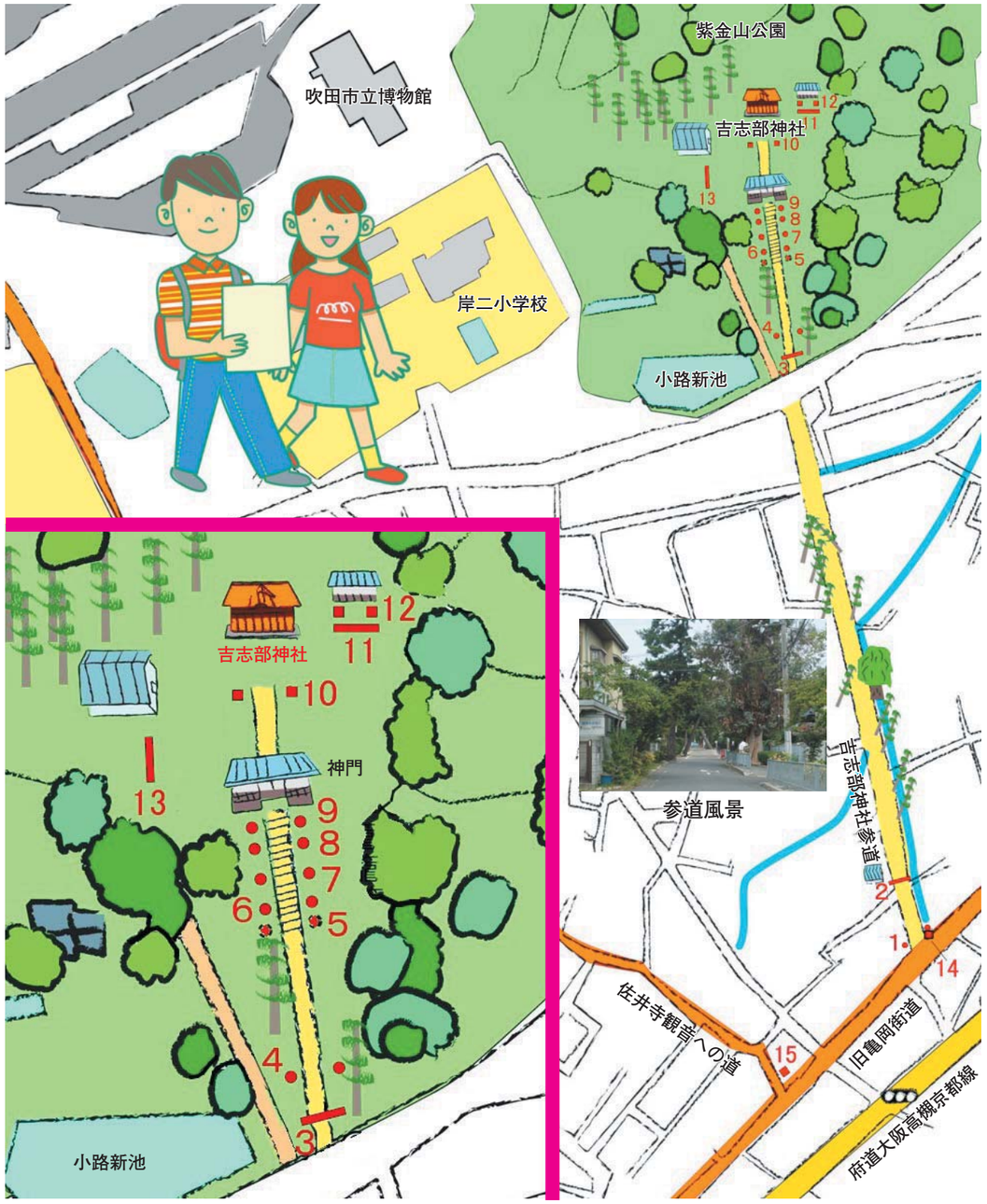
下層ピット（北東から）



遺構平面図

吉志部神社周辺の石造物

吉志部神社周辺には鳥居、燈籠、狛犬、道標など様々な石造物があります。近年建立されたものもありますが、江戸時代のものや、年号や願主名、石工名等が刻まれたものがあることから、地域の貴重な歴史資料となっています。こうした石造品はそれぞれ趣があり、じっくり観察すると興味深いものです。



四角型燈籠（神前型）

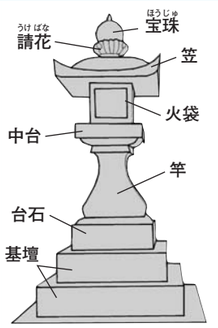
1 燈籠
寛延 3（1750）年

4 燈籠
天保 2（1831）年

8 燈籠
文化10（1813）年

9 燈籠
明和 6（1769）年

9 燈籠の細部
「明和六年丑　九月吉日」と刻まれています。



燈籠細部名称図

いずれも笠、火袋、中台が四角形で、竿が繰付角柱の四角型燈籠です。

四角型燈籠

6 燈籠（左燈）
延宝 4（1676）年

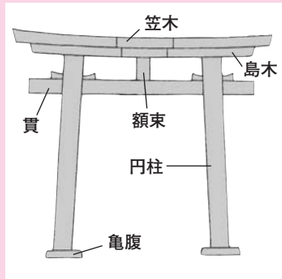
7 燈籠（左燈）
貞享 5（1688）年

いずれも笠、火袋、中台が四角形で、竿が円形の四角型燈籠です。6の右燈は寛永21（1644）年、7の右燈は明治16（1883）年の建立です。

明神鳥居

2 鳥居　平成 2（1990）年

3 鳥居　平成10（1998）年



明神鳥居細部名称図

13 鳥居　元禄 5（1692）年以前

いずれも反りのある笠木と島木、貫、額束、内側に傾いた2本の円柱、亀腹からなる最も普通に見られる鳥居です。

道　　標

15 道標
一石五輪塔形の江戸時代の道標です。旧亀岡街道と佐井寺観音へ向かう道の分岐点にあります。

14 道標
大正15（1926）年建立で市内に現存する最も新しい道標です。吉志部神社の参道入口にあります。

＊その他

5 旧鳥居柱（文化 7（1810）年）　10 狛犬（現在修復中）

11 摂社鳥居（昭和49（1974）年）　12 狛犬（昭和49（1974）年）

鎮守の林は残った ～吉志部神社の火災による社寺林への影響～

高畠　耕一郎（吹田自然観察会事務局長）

焼ける前の神社と林（2008.3.30）

国の重要文化財に指定されていた吉志部神社本殿は、平成20（2008）年５月23日に火災により全焼しました。その時、神社裏にあった社寺林の大半も焼けてしまいました。

焼失前は、シイノキ、クス、アラカシなどの照葉樹林を代表するような木々が神社の屋根を越えて大きく育ち、こんもりした林の中に神社があるような、荘厳な雰囲気を醸（かも）し出していたのです。いわゆる鎮守の森とされる風景を吉志部神社も持っていたのです。吹田市内でも、このようなシイノキの大木が神社の林として残っていたのは大変貴重なことでした。

神社裏で焼け残った木々たち（2010.4.5）

ＮＰＯ法人・すいた市民環境会議が2007・2008年にかけて吹田市の古木大木調査をしていますが、この焼けた２本のシイの大木は、ツブラジイで幹周りは282㎝と263㎝、高さは２本ともに19ｍでした。282㎝のものは、吹田市最大のシイノキです。シイノキで２ｍを越えている大木は吹田市内で８本しか確認されていませんから、その内の２本今回の火災で無くしてしまった事になります。

吉志部神社の敷地内にある木は、住民も手をつけないでいたため、神社裏の林は、面積こそ小さいですが、遷移が進み、常緑樹のシイノキやアラカシなどが大きく育っていったと思われます。

焼け残ったシイノキで神社側に面していた幹は、火災の影響で表皮が黒く焼けただれていましたが、反対側の幹は、そのまま残っています。そのため、運が良ければ、生き残っている反対側の枝や幹から新芽が出てくる可能性があり、期待していました。火災からほぼ２年たった今年の夏、その焼け残っていた面から、続々と新芽が出て、緑色の葉をつけていることがわかりました。このまま行けば、このシイノキは立ち直り、育っていきそうです。

今、吉志部神社本殿は再建中で、平成23年まで工事が続く予定ですが、その時には、神社裏の木々も再生し、将来再び、照葉樹林が残る社寺林として復活して欲しいものです。

新芽を出し、復活しつつあるシイノキ
（再建中本殿の裏）

吉志部神社社殿の再建

秋季特別展「災害から地域遺産をみなおす」では主要な展示として吉志部神社の復興を取り上げることとなりました。本殿等が焼失してから極めて迅速に再建がすすんでいるようですが、そのあたりのことを、再建を進めておられる吉志部神社宮司の奥田正夫さんにお話しをうかがいました。

ー再建工事が着々とすすんでいますね。神社には氏子さんがたくさんおられるのですか？

奥田宮司　大阪府に届け出ているのは400人です。昔は四つの村だったようですが、現在は、小路（しょうじ）、東、南吉志部、光明町、七尾、寺内（じない）と岸部天道を入れて６ヶ村と１地区です。かつては典型的な農村で、用水路やため池がたくさんありました。神社の山にのぼると、そこから自分たちの村の田畑が眺められるという立地で、平野の向こうには生駒の山が見えます。

ー社殿の後にすばらしい森がありましたが、あれは被害を受けなかったのですか？

奥田宮司　映像記録をみると、火柱がどーんとあがって、そのまま社殿が一気にくずれました。それが幸いしてか火はまわりにおよばなかった、風がなかったのもよかったです。それでも古い時代からのシイの大木が焼けました。再生したのは4,5本だけで、あとは切らざるをえませんでした。

ーなぜこんなにはやく復興できたのでしょうか。その秘密はなんでしょうか。

奥田宮司　父（先代宮司）の思いと氏子のみなさんの熱意でしょう。父は当時入院していたのですが、焼失した当日に病院から帰ってきて、見るなりすぐに「新しく建て直そう」と言いました。そう決意すると、二日後に総代会を招集して、本殿を元通りに建て直す決議をしました。それからすべてが進み始めました。

ー2010年の秋の大祭までにはぜひ建てたいと言っておられましたね。

奥田宮司　ちょうど四百年祭にあたり、それをつとめるのが父の夢でした。一つの節目と考えていたんでしょうね。しかし、そう簡単にはすすみませんでした。

ー発掘調査では社殿の下を掘り、慶長以前にも社殿が建っていたことがわかりましたね。

奥田宮司　そうですね。言い伝えのひとつが事実として明らかになりました。七間社の以前に一間社拝殿２棟であることがわかりました。今回の七間社の本殿の復元には、以前調査に来られたことのある櫻井敏雄先生をお呼びして半年以上かけて調べていただきました。来年３月には完成の予定です。

ー再建が順調に進むことをお祈りいたします。本日はどうもありがとうございました。

（聞き手　小山修三）

上棟式の風景

平成22年度（2010年度）実験展示　　平成22年9月5日～9月30日

「大学生が考える博物館展示 ～モノが魅せる過去～」

博物館では、毎年学芸員資格取得をめざす大学生を受け入れて実習を行っています。博物館では専門知識を有した学芸員が調査研究活動や展示を含む普及活動などにつとめていますが、実習は、教員実習と同じく、実地に博物館の仕事を体験し学ぶ重要なカリキュラムです。今年は民俗、歴史、考古班に分かれ、館蔵品を対象に、展示を企画し資料の陳列までを実際に実習生自身が行いました。昨年までも陳列まで行う実習を行っていましたが、一般に公開するのは初めての試みです。

９月18日には「大学生と博物館」と題して小山館長と語るワークショップが行われました。最初に小山館長より、30代以上に比べ、20代の来館者が少ない現状が述べられ、「若い人がなぜ博物館に来ないのか、どういう展示をすれば若者が興味をもち来てくれるのか。」と、問題提起しました。まず、実際に展示実習に参加した学生たちが反省点などを語りました。民俗班は初期電化製品を中心に展示しましたが、実習生は、若い人でも興味を持ってもらえるようさわれる体験コーナーを作ったこと、家事に使うモノや娯楽に使うモノというように使用目的によって分けたことや、若い人にもわかりやすいよう今のテレビもあわせて展示したかったが、写真での展示になってしまったことなどを述べました。江戸時代の絵図を展示した歴史班の実習生は、古文書や絵図を読むことに時間を割いた、今の神崎川の写真を出したいという意見などは出たが実行できず、絵図を見せる工夫が足りなかったかなと述べました。考古班は中世の蔵人村の出土遺物を展示しましたが、土器は地味で近寄りがたい感じの資料なので台をカラフルにするなど工夫した、蔵人くんというキャラクターを設定したが、20代の人には幼かったかも知れないと述べました。これに対し、博物館学を担当されている京都産業大学の鈴木久男先生は「考古資料が地味だと思ったことはなかったので、ショックだった。勉強になりました。」と笑いながらコメントされました。歴史系の専攻分野の学生はわずかなので、実習生のコメントは一般の来館者の意識に近いのかもしれません。実際に展示をみた参加者からは、電化製品は昭和30年代といきなり古いモノにせずに、例えば消費電力など昔と今とくらべたらどうか。今の若者が懐かしいと思うものも並べたら、展示につながりができるのではないか。展示されている江戸時代の絵図が現在どの地点にあたるかを示して欲しかったなどの意見がでました。さらに、資料に興味をもってもらうためには、人を引きつける展示解説の話術や展示の解説文を工夫する必要があるとの意見が出されました。国立民族学博物館の五月女賢司氏からは世界的にみても20代は博物館に来ない世代であること、幼児をもつ親の世代に働きかけることが将来の博物館利用者を増やすことにつながるのではないかとのコメントがありました。「来館者数だけで評価するのはいかがなものか。」という意見に対しては、「公共で開かれた博物館の役割を考えるとやはり人が来なければだめじゃないか、内容が学術的に高いということに逃げ込んではいけない」と小山館長が応じました。

後半は展示室で実習生による展示解説を行いました。実習生が解説しているというよりも、昔や地元のことをよく知っている観覧者の方が実習生に説明している場面が多く見られました。最後に観覧者の反応を知ることもできて、実習生はいい体験になったのではないかと思います。　（池田直子）

実習生による展示解説

●開館時間
午前９時30分～午後５時15分
●休 館 日
月曜日、祝日の翌日
12月29日～１月３日
http://www.suita.ed.jp/hak/

吹田市立博物館だより　第44号
平成22年（2010年）10月8日発行
吹 田 市 立 博 物 館
〒564-0001
吹田市岸部北４丁目10番１号
TEL.06（6338）5500
FAX.06（6338）9886

この冊子は、4,000部作成し1部あたりの単価は32円です。